

生涯スポーツへの取組について
— フロアホッケーをとおして —

山形県立上山高等養護学校
校長 長崎郁夫

1 はじめに

本校は昭和59年4月に山形県内はもちろん、東北で初めて開校した知的障がいのうち、軽度の生徒が学ぶ高等部単独の特別支援学校です。本校は山形県の南に位置する上山市にあり、スキーや樹氷で有名な蔵王を望む自然豊かな環境にある学校です。山形県内にはもう一校高等養護学校がありますが、本校は県内の南部約2/3程の地域が学区になっています。従って在学学生78名のうち、遠距離により通学が困難な生徒35名が寄宿舎で生活しています。山形県内8校ある知的障がい特別支援学校（併置校1校）の中で、本校は以下の教育目標のもと日々の教育活動を実践しています。

（これ以降メールマガジンの続きとなっています。）

教育目標「一人一人の障がいの程度や特性に応じた後期中等教育を行い、将来社会的に自立できる生徒の育成を図る。」

とあります。また、この教育目標を実現するために6つの目指す生徒像を掲げています。その中の1つに「趣味や楽しみをもち、余暇を上手に過ごす生徒」の一項目があります。これは教育目標にあるところの「社会的に自立」をめざし、就労した際にも自ら主体的に職業以外に社会と関わることの大切さから、健全な余暇活動を求める姿勢を育もうとするものです。今回はその一例として、フロアホッケーをとおしてこの余暇活動への参加について、体育の授業との関連等を含め紹介したいと思います。

2 フロアホッケーについて

障がい者の参加するスポーツは、通常の競技ルールに特定のルールを付加することで、多くの障がい者が楽しむことができるように工夫が凝らしてあります。ここで取り上げるフロアホッケーもその一つであり、名前の如く内容はホッケーによく似ており、柔らかくリング状で大きめのパックを、棒状のスティックによりゴールへ入れるチームでプレーする競技です。（詳細は日本フロアホッケー連盟のホームページをご覧ください。）本校ではスペシャルオリンピックス日本冬季大会が2008年山形県で開催されることが契機となり、前年の2007年より本校生徒を中心としたチームが編成され、大会へ参加しました。

3 授業としての取組

現在教科としての体育の授業は各学年とも一週間に3時間が組まれており、その中で各学年とも概ね15・6時間がこのフロアホッケーを学習内容として取り入れています。1年生では初めて体験する競技なので、主に用具の使い方やルール及び基本的な動作について学習します。2・3年生になると実際のプレーを中心に行い、各人の技術の向上

や、チームとしての連携したプレーについて学習します。

2年3年と学年が進むにつれ体格・体力も向上し、動きも速く自由にスティックを操り、フェイントとも思える方向転換など、高度な技術を身に付けゲームを楽しむことができます。また声を掛け合うことでの自己表現や仲間の動作を考えるて動くことなど、自己と仲間そして対戦相手と意識し合いコミュニケーションの拡大にもつながると考えられます。

4 余暇活動としての取組

本校では現在月二回の計画で体育館を解放し、卒業生を中心に練習活動を行っています。人数は卒業生が十数名に在校生が数名で、参加者数の規模としてはそう大きなものでないのですが、練習日に会えることを楽しみにし電車やバスを乗り継ぎ、駅から20分以上かけ歩いて学校まで練習に通ってきます。今現在恒常的に練習に参加してくる卒業生の数について把握はできていませんが、かなり長い期間休まずに参加している卒業生が多いことは確かです。

練習は午前中で終了しますが、学校帰りの午後から三々五々時間を楽しみにし、職場のことや家族のこと、あるいは悩みの相談など情報交換の時間として有効に活用しているようです。

5 終わりに

トータルとして脈絡のない内容に終始してしまいましたが、要は本校の紹介とフロアホッケーの紹介。またそれを体育の授業の中に取り入れ、卒業してからも本校とのつながりを持ち、授業で学習した競技が余暇活動の一つとして社会に出てからも生活の上で大切な役割を果たしていることを紹介してみました。ともすると限られた交友関係であったり、あるいは孤立しがちである障がい者が、一つの打ち込めるものと出会うことにより、社会性をより広げ生き甲斐を持って社会参加ができるものと信じています。もう一点付け加えるとすれば、知的障がい者を進んで雇用しているある会社では、このフロアホッケーのチームを持ち、社内でも余暇活動の一つとして取り組んでいることを紹介し本稿を閉じたいと思います。